

危機管理と非常時想定

国文学アナリスト
大石久和
Hisakazu Obishi

きわめて残念なことに、わが国は西欧諸国などに比して何についても危機や非常時についての想定が甘かったり、なかったりする国である。愛する者の死の形が「紛争による虐殺」であった国々と異なり、わが国では「自然災害による理不尽な死」であったために、恨んだり復讐を誓ったりする相手がない国であった。この数千年にわたる長い歴史の経緯が、彼我の違いを規定しているのだが、いつまでもこれでいいのかとの反省が必要だ。

われわれ日本人は、危機想定ができないどころか、それを忌避し否定する性向を持っているとの自覚が必要だと考える。

核シエルトの設置率

その一例に、核シエルトの設置率を調べてみよう。

北朝鮮はミサイル発射を頻繁に行っている。アメリカの独立記念日に、わざわざ挑発するかなのようなメッセージを添えてICBMを打ち上げるなど、東アジアの安全保障状況は混沌としてきている。

一発でも日本や韓国に打ち込めば壊滅的な攻撃を受けるのは確実だから、さすがにミサイルを見せびらかすだけで行動は起こさないだろう

と多くの人が高をくくっているが、あの独裁者の国だから不安はぬぐえないのが現実だ。

そのため、わが国でも核シエルトの設置がにわかには話題となっている。日本核シエルト協会の調べによると、各国のシエルト設置状況は以下の通りである。

スイス一〇〇%、イスラエル一〇〇%、ノルウェー九〇%、アメリカ八二%、ロシア七八%、イギリス六七%、シンガポール五四%、日本〇・二%（%は人口比の収納能力）

韓国には各戸のシエルトはあまりないが、ソウルには三、〇〇〇箇所以上の避難シエルトがあり、それは一、〇〇〇万人分にもなるという。スイスでは政府施設のどこにでも「地下核シエルト」が常設されており、このシエルト設置は二〇〇六年までは法律による義務であったようなのだ。

核の時代が来ているというのに、また近隣にはロシア・中国など強力な核保有国があるというのに、なんとのおんびりしたことなのだろうかという状況であるが、このことは今まで話題にもならず、誰も関心を示してこなかった。

現在でも、核シエルトの設置を考える人が増えたというが、大規模な地下工事を行わなければならず簡単なことではないから、ほとんど

関心が少しは高まった程度の話になっている。しかし、世界の現実を紹介した通りで、わが国だけが丸裸なのである。

中央銀行総裁の不在

危機意識が欠けている典型事例がある。数年前に日本銀行総裁の任期が迫り、政府が後任の国会承認を求めたことがあった。ところが、野党の反対があつてなかなか承認されず、現総裁の任期が切れそうになったことがある。

わが国の規定では、任期が切れてしまうと自動的に退任となり、後任が決まっていなると総裁が空位となってしまう。経済政策上欠かすことができない中央銀行総裁がいらないという非常時が簡単に実現しようとしていたのだった。

なぜこのようなことが起こるのかと言え、
「国会で後任総裁の承認が下りないことはない」という非常時想定が欠落があつたからである。諸外国にも、国会承認人事はあるようなのだが、「承認が得られない場合には前任の任期が自動延長される」との規定があるというのだ。つまり、議会で承認されないことはあり得ると考えており、非常事態が想定されているのである。この当ても、与野党の対立構造の報道はあつ

たけれども、「空位が生じてしまうような規定しかないこと」についての危機認識が話題に上ることはほとんどなかった。その後も、こうした事態を避けるために、自動延長規定ができたという話は聞かないのである。

実はこのようなことはいくらかもあるのだ。東日本大震災では、町長が行方不明となつてしまった。災害法制では、現地の実情に詳しい基礎自治体の首長に大きな責任を負わせているが、その長が行方知れずになることを想定してはいない。

では、現実二〇一一年に行方不明事件が起こつたのだから、また、想定外はあつてはならないと言ふのだから、災害時などでの首長の代位規定はその後整備されたのかというと、この話も聞かないのである。相変わらず、起こつてからしか考えないのだ。

非常時想定放棄

われわれは、紛争に明け暮れてきた民ではないから危機想定ができないのだが、そのことから来ている大きな問題がある。信じがたいことだが、危機想定ができないどころか、してはいいけないと考えている民なのである。

途切れることのない紛争が続いてきたヨーロッパでは、当方が「まさかそんなところからは攻めてこないだろう」と考えるところは、敵が「相手は、こんなところからは攻めてこない」と考えている可能性が高い」と判断して、攻撃・防衛戦略に組み込むところだ。

起こりにくい、起こりえないと考えたことほど、考えておくべきだったという経験をイヤと言ふほどしてきたのが彼らだから、危機想定は思考の一丁目一番地だ。

こちらは事前には備えようのない自然災害が危機想定の対象だから、あらかじめ考えることもできないし、考えておくにしても、科学技術の進んだいまでも「どのような種類の災害がいつどこで、どの規模で起こるかかわりようもない」世界にいるのだ。

この世界で危機想定をせよと言うことは、ビクビク生きていけと言うことにしかならないから、ついに「日本人は思考回路の中から危機想定を削除した」のだった。そして不吉なことを口に出すと、それが現実起こるとして禁じたのだ。自衛隊の危機想定研究を「それが危機を生む」と国会が封印したのは、かなり昔のことだが今も変わらないのである。